

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01068

研究課題名（和文）戦争が歴史化される過程～第一次世界大戦期イギリスにおける戦争博物館とジェンダー～

研究課題名（英文）Process of Historicising the First World War: War Museums and Gender in Britain

研究代表者

林田 敏子 (Hayashida, Toshiko)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：10340853

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一次世界大戦中に考案された戦争博物館を、史料を集積する単なる「箱」ではなく明確な目的をもった「装置」ととらえ、コレクションや展示が「つくられる」過程のなかに、大戦が記憶化/歴史化されるプロセスを探ろうとするものである。戦争博物館は、同時代においては戦意の発揚や犠牲者の追悼といった機能を果たし、戦後も長く史料を収集することで、各時代の歴史観を反映した大戦像を創出、発信する「劇場」として機能した。博物館の運営やコレクションに関する史料の分析によって、展示される「客体」としての女性だけでなく、女性に関するコレクションや展示をつくる「主体」としての女性の姿が浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦中から戦後の約1世紀を視野にいたことで、戦争博物館という場で大戦の記憶や歴史が創出され、時代の変化とともに書き換えられていくプロセスを追うことが可能となった。とりわけ、コレクションの蒐集や展示に関わった女性委員会の活動からは、「女性が女性の歴史を紡ぐ」上で何が重視されたのか、またどのような葛藤や軋轢があったのか浮かび上がってくる。博物館の展示を「つくる」主体としての女性に着目することで、「大戦と女性」をめぐる記憶や歴史が、複数のアクターの相互作用によって構築されたものであることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）： This study examines the role of war museums, originally planned to be established during the First World War, as purposeful “devices” rather than mere “boxes” for collected historical materials. It explores the process of memorializing and historicizing the First World War from a gender perspective in the process of “creating” collections and exhibitions. War museums served the function of raising war spirits and commemorating the victims during the war. Subsequently, they continued to collect historical materials and functioned as “theatres” to create and disseminate images of the First World War, reflecting the historical perspectives of each era. Analysis of historical documents related to museums’ operations and collections has revealed the representation of women as not only “objects” to be exhibited but also “subjects” who create collections and exhibitions on women’s activities and experiences during the First World War.

研究分野：西洋史学

キーワード：西洋史 イギリス史 第一次世界大戦 博物館 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 背景

戦争の記憶をめぐる歴史研究の興隆を背景に、戦争博物館への学問的関心が高まっている。近年の研究は、「ミリタリズムは平時にこそ強化される」というシンシア・エンローの議論の影響を受け、平和の希求を第一義とする戦争博物館が、現代もなお軍事的動員的手段として機能していることを前提に、戦争の記憶がいかに戦前の価値観を復権させるのに寄与してきたかを明らかにしてきた。総力戦の起点となった第一次世界大戦に関しても、戦後、ヨーロッパ各国で設立された戦争博物館が、いかに「大戦の記憶を創り出す装置」として機能したかに焦点をあてる研究が主流となっている。しかし、大戦が記憶化される過程、つまり博物館のコレクションや展示がつけられるプロセスについては十分な考察がなされてきたとはいえない。

(2) 動機

これまで筆者は、20世紀における二つの世界大戦に関する女性たちの語りを分析することで、個人がライフ・ヒストリーのなかに大戦をどう位置づけたのかを研究してきた。そこで直面したのは、博物館がコレクションの一部として収集した回想録やインタビューといった「語り」は、その数から見ても、また博物館のコレクションであるという特殊性から見ても、女性たちの大戦経験を一般化したものではないという史料上の限界であった。しかし、あらためて指摘するまでもなく、こうしたエゴドキュメントは本来的に「偏り」を内包しており、網羅的・体系的な語りや、平均的・典型的な語りなどそもそも存在しない。そこで本研究では、女性たちの「語り」を語り手である女性と博物館の相互作用によって生み出されたものにとらえ、戦争博物館を大戦の記憶と歴史がつけられる場として分析することを試みた。

2. 研究の目的

本研究は、イギリスにおけるジェンダー構造に大きな変化をもたらした第一次世界大戦を、戦争博物館という媒体を通して考察しようとするものである。第一次世界大戦期にヨーロッパ各地で設立された戦争博物館は、戦争の記録を集積するアーカイヴであると同時に、国民による戦時貢献（とりわけ戦死者）を顕彰する「記憶の場」でもあった。また、それは大戦に関する大文字の歴史（正史）を紡ぎ出し、それを社会に広く発信する「劇場」としても機能した。第一次世界大戦の記憶は、戦後直後、戦間期、1970年代、1990年代と複数の画期において段階的に修正され、大戦と女性に関する記憶や歴史もまた、70年代の女性史の興隆を背景に大きくその像を変えてきた。戦後100年の歴史において繰り返し記憶化されるなかで、歴史としての大戦像が形づくられてきたといえる。

本研究は1990年代までを第一次世界大戦の「長い戦後」ととらえ、各時代のなかで戦争博物館が果たしてきた機能を多角的に分析することで、「大戦と女性」をめぐる記憶や歴史の構築過程を明らかにすることを目的としている。第一次世界大戦という過去は、それぞれの時代においていかに解釈され、記憶化・歴史化されてきたのか。戦後、ジェンダー観が大きく変容していくなかで、女性の大戦経験にはどのような意味や価値が付与されたのか。戦争博物館というメディアにおいてコレクションや展示がつけられる過程のなかに、大戦期の女性が記録化/記憶化されるプロセスを探った。

3. 研究の方法

(1) 戦争展への着目

本研究が主な分析対象としたのは、第一次世界大戦中に考案されたイギリスの帝国戦争博物館（Imperial War Museum：以下IWM）である。IWMは未だ勝敗が決していない大戦中に考案され、6つの委員会を立ち上げて、関係資料の収集に着手した。収集されたコレクションは、大戦中、戦意高揚と資金集めを目的として開催された戦争展で随時公開された。本研究では、大戦中、全国各地で開催された戦争展を、IWMの前身にあたるもの、いわば「動く戦争博物館」ととらえ、同時代において「大戦を展示する」という行為がもった意味に迫るべく、博物館の議事録、展示目録、ポスターやピラ、新聞記事等の分析をおこなった。

(2) 女性のイニシアティブ

本研究は、戦争博物館の展示が明確な意図をもってつくられたという先行研究の成果を踏まえつつ、コレクションや展示が「いかに」つくられたかに焦点をあてている。主な分析対象としたIWMは、創設当初から戦時の女性労働に関する資料の収集に力を入れた。コレクションを「つくる」担い手として女性労働小委員会が立ち上げられ、委員長をはじめとする中心メンバーはすべて女性で構成された。博物館のコレクションづくりへの女性の主体的関わりは、他国には見られないイギリスの特徴の一つであった。女性労働小委員会のコレクション・ポリシーとはいかなるものであったのか。女性の大戦経験は男性の大戦経験といかに差異化され、また関係づけられたのか。企画から収集、展示までの過程をたどりながら、女性委員会が残した報告書や調査書、書簡等の分析をおこなった。

(3) 「語り」のコレクション化のプロセス

大戦の語りを収集する「主体」としての博物館という観点から、女性の回想録やインタビューがコレクション化される過程についても分析した。大戦に関する女性の「語り」については、手紙や日記といった同時代的史料だけでなく、事後的に書かれた回想録が数多く残されている。女性の場合、刊行された回想録は男性のものに比べ極端に数が少ないため、戦後、博物館は意識的に女性の回想録を収集し、1970年代以降はインタビューという形で女性の「声」を残そうとした。本研究では90年代に大規模な「語り」の収集に乗り出したIWMだけでなく、60年代から70年代の大戦の「記憶ブーム」のなかで設立された国立陸軍博物館(National Army Museum)、空軍博物館(Royal Airforce Museum)が所蔵する回想録やインタビュー史料にも調査対象を拡大し、女性史とオーラルヒストリーが台頭した70年代と、失われゆく記憶への危機感が空前の記憶ブームを巻き起こした90年代の比較を試みた。

4. 研究成果

博物館コレクションの形成過程は大戦の記憶化・歴史化の過程そのものであり、博物館の設立計画や蒐集方針には、大戦をいかなる形で顕彰し、記憶し、歴史化すべきかをめぐる当時の考えが凝縮されている。大戦はいかに記録されたのか、また、いかに記憶されるべきだと考えられたのか。個々の大戦経験というパーソナルな視点と、明確な「大戦像」を提示する博物館というパブリックな視点を交えながら、両者の相互作用によっていかなる大戦像が紡ぎ出されたのかをさぐった。以下3点にわけて本研究の研究成果を示しておく。

(1) 戦争博物館が有した同時代的意義

大戦中、イギリスでは女性の戦時貢献(なかでも軍隊での非戦闘任務の遂行)をテーマとする複数の展覧会が開催された。主にロンドンを始めとする都市部で開催された複数の戦争展を戦局や戦時動員政策との関係性のなかに位置づけながら、戦争博物館が有した同時代的意味について考察した。

戦争博物館や戦争展は、死者を公的空間で認知するための場であり、また遺族が悲しみを表現し、近親者の死に意味を付与するための場であった。さらに、そこは人々が戦時という「今」に対処し、そこを訪れた人が戦争という同時代の出来事の全貌をジオラマなどのビジュアル展示を通して把握するための場でもあった。戦争博物館は、死をも含めた個々の戦争体験が「居場所」を与えられ、意味を付与される空間として機能した。

(2) 女性のイニシアティブ

博物館のコレクションや展示が「つくられる」過程には総力戦を支えた女性たちが深く関わっていた。博物館の「客体」としての女性だけでなく、コレクションと展示をつくる「主体」としての女性の役割を明らかにするため、大戦中からIWMのコレクションの形成に携わった女性労働小委員会に焦点をあて、「女性が女性をコメモレイト(顕彰)する」という趣旨のもと立ち上げられた同委員会が発揮したイニシアティブに迫った。女性労働小委員会は文書資料だけでなく、絵画や写真、ジオラマといった視覚資料の収集や制作にも力を入れた。委員会はテーマ設定から画家の選定、制作依頼に至るまで広範な責任を負い、女性写真家を伴って戦地への撮影旅行を敢行するなど博物館のコレクションづくりに主体的に関与した。とくに絵画や写真、模型といった美術史料、ビジュアル史料の収集過程に着目することで、女性たちがコレクションづくりに積極的に関与した事実を明らかにした。

(3) コレクションとしての「語り」と女性の大戦経験

本研究の独自性は、文字史料や写真、絵画といった史料に加え、「語り」(女性の大戦経験)を博物館が意識的に収集したコレクションの一つとしてとらえるところにある。博物館側が収集の価値があると判断した語り手(書き手)とはどのような女性だったのか。彼女たちはどのような「語り」を期待され、それにどう応じたのか。「大戦と女性」をめぐる歴史を博物館と語り手の相互作用によって構築されたものとして再考した。

とくに着目したのは、男性兵士とも女性幹部とも異なる「普通の」女性たちによる語りである。自らの大戦経験に特段の価値を認めていない女性たちに対し、博物館は新聞や戦友会、女性組織を介して呼びかけをおこなった。組織的なアクセスからこぼれ落ちてくる人々の声を拾い上げるために、博物館は個人的な伝手を頼りに働きかけ、「書く」ことにハードルのある女性に対しては執筆をサポートするなど積極的に関わった。戦勝国イギリスにおいては、男性だけでなく女性もまた大戦をポジティブに描く傾向が強く、戦争行為そのものの同時代的意味に疑問を呈するような語りはほとんどみられない。戦争の事後的な語りの典型である「加害と被害」という枠組から大きく外れた彼女たちの語りは、大戦の歴史をつくる博物館のコレクションとしてきわめて重要な意味をもったといえる。

(4) 今後の展望

第一次世界大戦の終戦直後、女性への関心はもっぱら戦時労働やヴォランティア活動に向けられており、展示の主眼は女性の戦時貢献を描き出すことにおかれていた。「女性が女性を顕彰する」ことを目的とした女性労働小委員会の設置は画期的ではあったものの、それは女性の戦時活

動や経験を男性のそれとは異なるものとしてゲッター化することにもつながったといえる。博物館の展示において、「女性」という枠組みそのものが見直されるようになるのは1970年代以降のことである。前線と銃後、男の戦争と女の戦争という二項対立からの脱却がいかんして試みられたのか、すなわち、「(男性とは異なる女性の大戦)」という枠を超えた新たな展示がどのように模索されたのかを探ることは、大戦を起点とする現代史をジェンダーの観点から読み返す意味でも不可欠な作業といえるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 67
2. 論文標題 軍隊のなかの女性たち 回想録から読み解く第一次世界大戦の記憶	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 寧楽史苑	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 24
2. 論文標題 覇権のマスキュリティの揺らぎ? 第一次世界大戦期イギリスにおける「弱き男」をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本ジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayashida Toshiko	4. 巻 12
2. 論文標題 Article 5. Museum as Propaganda : War Exhibitions in Britain during the First World War	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 UrbanScope : e-journal of the Urban-Culture Research Center	6. 最初と最後の頁 57 ~ 64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24544/ocu.20210709-003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 3498
2. 論文標題 書評 雑誌のカバーガールという「虚構」から浮かび上がる世界大戦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 843号
2. 論文標題 軍隊とマスキュリティ 第二次世界大戦期イギリスにおける女性同性愛をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 29-55, 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 5号
2. 論文標題 書評 上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社、2020年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア・ジェンダー文化学研究	6. 最初と最後の頁 103-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 267号
2. 論文標題 第一次世界大戦の記憶とジェンダー イギリスにおける帝国戦争博物館と女性労働小委員会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 36-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 15号
2. 論文標題 書評 望戸愛果『「戦争体験」とジェンダー アメリカ在郷軍人会の第一次世界大戦巡礼を読み解く』 (明石書店、2017年)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジェンダー史学	6. 最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林田敏子	4. 巻 268号
2. 論文標題 書評 石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか 技術とジェンダーの日独比較』（ミネ ルヴァ書房、2018年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 230-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林田敏子
2. 発表標題 覇権的マスキュリティの揺らぎ？ 第一次世界大戦期イギリスにおける「弱き男」をめぐって
3. 学会等名 日本ジェンダー学会 第23回大会 大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金澤周作監修、藤井崇ほか編、林田敏子ほか著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 321
3. 書名 論点 西洋史学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------